

Works of Japanese Juvenile Art at the Time of the Pacific War (28) : Articles from the Shokokumin Shimbun (16)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-05-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 熊木, 哲 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6857

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



「戦時下における児童文化」について（その二八）

―「少国民新聞」（東京）における読者投稿作品の位相と展開（二六）―

熊 木 哲

【キーワード】 戦時下、児童文化、少国民新聞、詩、昭和十八年

本稿では、「少国民新聞」（東京）に掲載された、昭和十八年の「詩」を四半期毎に検討する。

引用に際しては、原則として、旧字体を新字体に改め、改行も、適宜、改めた。

前稿同様、作者については、国民学校の在籍校名・在学年・性別を記すにとどめた。在学年次のうち「高一」「高二」は高等科一年、二年を示す。

なお、前稿「戦時下における児童文化」について（その二七）（「大妻女子大学紀要―文系―第五十一号、平成三十一年（二〇一九）三月）では、副題に「少国民新聞」（東日版）における読者投稿作品の位相と展開」と記したが、昭和十八年一月一日から、東京日日新聞社は毎日新聞社に社名変更となり、「少国民新聞」（東日版）も「少国民新聞」（東京）となったことを記しておく。

また、この年、七月一日から、東京府と東京市を統合して、東京都となったが、この年の作品掲載の概括に際しては東京都とし、作品検討に際しては、六月三十日までは「東京府」「東京市」、七月一日以後

「戦時下における児童文化」について（その二八）

は「東京都」と、掲載時の表記に依った。

一 昭和十八年の「詩」作品の展開

昭和十八年の検討対象は、一月一日（金・第一九五二号）から十二月三十日（木・第二二六二号）までの、毎週月曜日の休刊日を除いた三十三日分であるが、毎週以外の休刊日が二日（二月三日と四日）。

また、国会図書館蔵「少国民新聞」は、一月二日（土・第一九五三号）、九月十六日（土・第二二七四号）、十一月二十四日（水・第二二三二号）、十二月十九日（日・第二二五三号）の四日分のマイクロフィルムが「欠」であり、検討対象は三〇九日分。

昭和十八年、「詩」の掲載数は三三〇作品。

内訳は、第一四半期が六三作品。

第二四半期が七四作品。

第三四半期が四三作品。

第四四半期が五〇作品。

昭和十八年に掲載された「詩」二三〇作品のうち、作品内容に「戦時下」色に見えるのは六五作品(約二八・三%)。

内訳は、第一四半期では六三作品中一六(約二五・四%)。

第二四半期では七四作品中一二(約一六・二%)。

第三四半期では四三作品中一二(約二七・九%)。

第四四半期では五〇作品中二五(五〇・〇%)。

因みに、「少國民新聞」の前身である「東日小学生新聞」の発行された昭和十二年から十八年における「詩」作品の内容に「戦時下」色を内容とする作品は、次のようになる。

昭和十二年は、二六二作品中一〇(約三・八%)。

昭和十三年は、三六三作品中三一(約八・五%)。

昭和十四年は、三四一作品中三七(約一〇・九%)。

昭和十五年は、三四八作品中三九(約一一・二%)。

昭和十六年は、三四八作品中三一(約八・九%)。

昭和十七年は、二九六作品中五五(約一八・六%)。

昭和十八年は、二三〇作品中六五(約二八・三%)。

十八年の「詩」は、掲載数が前年十七年より六六作品減少したにもかかわらず、「戦時下」を内容とする作品の掲載数は一〇作品増加し、掲載率もほぼ一〇%の上昇となった。また、掲載数も、十二年以降最少であるにもかかわらず、戦時下を内容とする作品の掲載率は十二年以後、最大となった。

なお、十八年一年間に、複数の「詩」作品が掲載された国民学校は、最多の三五作品が一枚(東京都荒川区第二峡田校・五年生一八作品・六年生一七作品)、三〇作品が一枚(山梨県穂積校・五年生八作品・六年生二二作品)、一九作品が一枚(秋田県西馬音内校・五年生一六作品・高一生三作品)、一三作品が一枚(山形県山寺校・三年生一〇作品・四年生三作品)、八作品が一枚(茨城県若松東校・一年生一作品・六年生五作品・高二生二作品)、七作品が三枚(秋田県山田校・六年生七作品、岩手県大槌校・六年生七作品、千葉県船橋市法田校・

五年生三作品・六年生四作品)、六作品が二枚(秋田県能代市向能代校・高二生六作品、山形県豊田校・三年生六作品)、五作品が三枚(秋田県草木校・二年生三作品・三年生二作品、茨城県日立市駒王校・三年生四作品・四年生一作品、静岡県稲取校・四年生三作品・五年生二作品)、四作品が一枚(福島県永田校・六年生四作品)、他に、三作品が四枚、二作品が九枚あった。

また、複数の「詩」作品が掲載された児童は、最多の四作品が一名(東京都荒川区第二峡田校六年女子)、三作品が六名(秋田県西馬音内校五年女子、秋田県山田校六年女子、岩手県大槌校六年男子、東京都荒川区第二峡田校五六年男子、山梨県穂積校五六年女子二名)、二作品が一七名であった。五六年は、第一四半期に五年生、第二四半期以後六年生を指す。

以下、四半期毎に検討するが、都合上、内容に「戦時下」色に見える作品に第一四半期から第四四半期まで整理番号を付し、内容的に類縁のものを併せて検討していく。

二 昭和十八年第一四半期における「詩」

第一四半期(一月〜三月)に掲載された「詩」は六三作品。この内、作品内容に「戦時下」色に見えるのは、次の一六作品であり、掲載作品に占める掲載率は(約二五・四%)となる。

- 1 「日本の力」 (神奈川県横浜市間門校六年男子、一月六日・水、第一九五五号)
- 2 「落下傘」 (千葉県竹岡校六年男子、一月十五日・金、第一九六三号)
- 3 「まきはこび」 (秋田県西馬音内校五年女子、同右)
- 4 「まき運び」 (秋田県西馬音内校五年女子、一月二十日・水、第一九六七号)
- 5 「雪かき」 (秋田県二ツ井校高二女子、同右)
- 6 「先生の手」

- 7 「木剣体操」
(秋田県能代市向能代校高二女子、一月二十七日・水、第一九七三号)
 - 8 「一本の釘」
(秋田県西馬音内校五年女子、二月十一日・木、第一九八六号)
(東京市荒川区第二峡田校五年男子、同右)
 - 9 「満洲の夜」
(秋田県能代市向能代校高二女子、二月十三日・土、第一九八八号)
 - 10 「ごはん時」
(山梨県穂積校五年女子、二月二十一日・日、第一九五五号)
 - 11 「東條さん」
(東京市荒川区第二峡田校五年男子、二月二十八日・日、第二〇〇一号)
 - 12 「梅ぼし」
(山梨県穂積校五年女子、三月十四日・日、第二〇一三号)
 - 13 「薪はこび」
(秋田県西馬音内校五年女子、三月十七日・水、第二〇一五号)
 - 14 「日章旗」
(東京市荒川区第二峡田校五年男子、三月二十一日・日、第二〇一九号)
 - 15 「東郷さん」
(群馬県伊勢崎市北校四年男子、三月二十八日・日、第二〇二五号)
 - 16 「雨降り」
(東京市荒川区第二峡田校五年女子、三月三十一日・水、第二〇二七号)
- 1 「日本の力」(神奈川県横浜市間門校六年男子、一月六日)。
日本の夢
それは大きな夢だ。
世界を一つの字とする
神武天皇以来三千年
日本はその夢の実現に
邁進するのだ。

以上は、四連四十行の作品の第一連。「世界を一つの字とする」と

「戦時下における児童文化」について(その二八)

は、「八紘一宇」のことであり、「僕」が「ゑかく」夢だという内容。「日本はその為に米英と戦ふ」のであり、大空にへんぼんと翻る「日の丸」を、「黄色い顔が、黒い顔が、白い顔」が、「感激にふるへながら拜んでゐる」のが、僕の夢だ。

2 「落下傘」(千葉県竹岡校六年男子、一月十五日)
大空にういた、落下傘。

風にゆられて、ふわりふわりと、
山の向かふへ飛んで行つた。

あとは、ただ、青空ばかり。

作品の全文。「落下傘」の着地予定は山向う。「落下傘」が見えなくなった空は「青空ばかり」。何事もなかったかのような「青空」だ。降下訓練であろうが、一見、長閑だ。

3 「まきはこび」(秋田県西馬音内校五年女子、一月十五日)

4 「まき運び」(秋田県西馬音内校五年女子、一月二十日)

13 「薪はこび」(秋田県西馬音内校五年女子、三月十七日)

三作品ともが、秋田県西馬音内校五年生の女子児童の作品で、同校での児童による勤労奉仕が内容。

3 「まきはこび」では、「先生がシャツ一枚で、がんばってる」。「先生」が先頭に立っての作業風景。

4 「まき運び」では、「みんなで学校のまき運び」だが、「中に一人が橋の上から水見てた」。作者の視線は、働く仲間に、休んでいる仲間にもむけられる。「まき運び」も楽ではないようだ。

13 「薪はこび」は三月の掲載であり、前二作品と同じ日の作業であるかは不明。「みんなでまき運びだ」が、リヤカーに積んだり、「なはでしよつて行く」学友もあり、「さまざまだ」と、その風景を写した。児童が力仕事の担い手ということだ。

5 「雪かき」(秋田県二ツ井校高二女子、一月二十日)

6 「先生の手」(秋田県能代市向能代校高二女子、一月二十七日)

7 「木剣体操」(秋田県西馬音内校五年女子、二月十一日)

9 「満洲の夜」(秋田県能代市向能代校高二女子、二月十三日)

何れも秋田の冬。

5 「雪かき」は、朝五時に起き、「分団員を呼び歩く」。地域の児童分団で、早朝の「雪かき」の日だ。「目的地へ走った」が「誰一人居らず、つもつた雪の上を風がふくばかり。」一人で雪をかく手に冷たい風が吹きつける。

6 「先生の手」は、朝礼であろうか。「気をつけ」の号令で、「先生のお手を見る。今日も赤い。どんなに寒くても、びんとのぼした先生のお手」。作者は、「冷たくは ないのだらうか」と、先生を気遣うが、この整列の中に作者もいるということだ。

7 「木剣体操」

女も男もうはぎをぬいで、

声たからかに木剣体操、

みんなの顔が赤くなつてる。

米英を勝抜くとがんばつてる。

作品の全文。耐寒訓練であろうか、「木剣」を持っての体操を、女子児童も男子児童も薄着になって、大きな掛け声を上げながら励んでいる様子だ。「少国民新聞」は、同年一月二十一日(木・第一九六八号)第一面に、「けふから耐寒訓練だ みんな元気です着の早起き体操」の記事を掲載。大政翼賛会が、「今二十一日の大寒の入りから、二月四日の寒明けまで」の期間に耐寒訓練の実行を決定し、「全国国民一人残らず鍛錬をして、御奉公しようというのですから、皆さんもしよになつてやらなくてはなりません」とし、その実行方法も伝えた。国民学校での実施方法の記事は見られないが、「木剣体操」は秋田県西馬音内校での取り組みであったか。

9 「満洲の夜」

「寒い。」と思ひながらモンペの中へ手を入れる。
足がびりびりいたむ。

どこか机の下で、お友達の上靴がばたばた音がする。

満洲に行つた友に、なんだかすまないやうな気がする。

作品の全文。寒い教室でのことであろう。耐えかねて、作者は「モンペの中へ手を入れ」、級友は座った椅子の下で足踏みて寒さをしているが、極寒の満洲に行った友の寒さを思えば、これ位の寒さに耐えられないことに申し訳ない、との気持ちか。詩題は、「満洲の夜」であるが、「満洲の友」の誤植か。

8 「一本の釘」(東京市荒川区第二峽田校五年男子、二月十一日)

道ばたに落ちてゐた一本の釘、

一本の釘でも、無駄には出来ない。

鉄砲や大砲の弾丸となつて

お役に立つのだ。

拾つて塀ぎはの廃品箱に入れた

そして「どうかお役に立つやうに。」

心でねがつた。

以上は、「一本の釘」の全文である。

どこの家でも学校でも、

しんちゆうのもの、銅のもの、

たくさん献納いたします。

釘一本もむだにせず、みんな御国にささげませう。

前年(昭和十七年)の十二月九日(水・第一九三三号)に掲載され

た詩「銅鉄の回収」の一節である

家庭にある「銅鉄」を回収して、戦時物資とする「金属類回収令」

が公布されたのは昭和十六年八月三十日。この方針は、学校を通して

児童に、「常会」を通じて家庭に伝えられ、地域では道路脇に「廃品箱」が設置されていたということである。

10 「ごはん時」(山梨県穂積校五年女子、二月二十一日)

12 「梅ぼし」(山梨県穂積校五年女子、三月十四日)

両作品は、同じ児童の作品。食に関わる内容で、その何れにも「兵隊さん」が登場する。

10 「ごはん時」

家ちゆうそろふごはん時、

みんながゑがほで代用食を

手に手に持つてたべてゐる。

兵隊さんのおかげなのだ。

ああたふといごはん時

「代用食」は、昭和十六年四月一日から、東京をはじめ六大都市で実施された割当通帳制による米の配給によるもので、前年(昭和十七年)には、秋田県の児童による詩作品「代用食」(能代市向能代校高一女子、三月十三日・第一七〇三号)が掲載されており、この時期その影響が都市に限らず地方にまで及んでいたということ。

ただ、前年の「代用食」では、父が、代用食が「国の経済にもなるし米の節約にもなる」ので、「これからもこうしてたべよう、とおつしやる」とあり、代用食が日常ではないことがうかがえるが、「ごはん時」では、代用食が食べられるのも「兵隊さんのおかげなのだ」となり、代用食は日々のこととなったということ。

12 「梅ぼし」

赤いきれいな梅干しよ、

遠い遠い戦地の兵隊さんの所まで、

此の梅ぼしが行くのです。

たくさん取つて

たくさんつけて、

「戦時下における児童文化」について(その二八)

送つてあげませう。

作品の全文。「戦地の兵隊さんの所まで、此の梅干しが行く」とあるが、慰問品として送るということであるのか、或いは、地域として軍隊に納入しているのかは詳らかではない。また、掲載時期からは、梅干しの寒干し風景のことか、或いは咲いている梅の花を見ての事か、これも明らかではない。何れにしても、梅干しが児童と戦地を結んでいるということだ。

11 「東條さん」(東京市荒川区第二峡田校五年男子、二月二十八日)

15 「東郷さん」(群馬県伊勢崎市北校四年男子、三月二十八日)

11 「東條さん」は、「新聞に大きく出されたお顔。がつちりと勇ましく、日本を背負つてゐる。」とあるように、新聞に掲載された写真を見たことが作品を作る動機ということ。「少國民新聞」では、この年の元旦(第一九五二号)第一面に「内閣総理大臣兼陸軍大臣 東條英機」の「年の初めの言葉」を写真とともに大きく掲載していた。

15 「東郷さん」は、「教室にはられた、東郷さん」の写真が、児童が「よいこと、してゐるとわらつてる」、「こそこそしてゐると、おこつてる」というもの。教室には、東郷平八郎元帥海軍大将の写真が児童を見下ろすように掲示されているということ。

14 「日章旗」(東京市荒川区第二峡田校五年男子、三月二十一日)は、朝起きて空に「輝かしい日章旗」を見ての作品。「ああ勇ましい日章旗」と結ぶ箇所が、戦時下ゆえのこと。

16 「雨降り」(東京市荒川区第二峡田校五年女子、三月三十一日)は、

「ぎあざあ雨降り」の中を「みんな元気」で歩いている内容だが、その様子が「兵隊さんがゆくやうに、元気でみんなならんでく。」とある。「兵隊さんがゆくやうに」の比喩が、戦時下ということ。

第一四半期の「詩」作品は、六三作品。この内、作品内容に「戦時下」色に見えるのは、一六作品であり、それ以外の四七作品は児童の日常生活に根ざした作品で、第一四半期の季節柄の作品には、次のような作品があった。

大根洗つてゐる母の手、

真赤な手、

鳥肌の手、

冷たい水の中へどぷりと入れる母の手。

しわがよつてゐる母の手。

夕暮の風に冷たさうに吹かれてゐる。

秋田県能代市向能代校高二女子の「母の手」(一月十五日・金、第一九六三号)。干し大根のためか、冷たい水にもかかわらず、何本も洗っているため、母の手は真赤で、鳥肌が立っている。加えて、夕風が吹きつけてきた。作者は傍らで見ているようだが、洗上げた大根を干すのが役目だったのだろうか。

海から真直に吹上げて来る風に、

下級生が頬を真赤にしてゐる。

風と戦つてゐるのだ。

そつと横から防いでやつたら、

ほつとしたやうに、私の顔を見上げた。

秋田県能代市向能代校高二女子の「風」(二月二十四日・水、第一九九七号)。「母の手」と同じ在籍校学年だが、別人。下級生は、作者が横になるまで気が付かずに寒風と「戦つてゐる」。「私」の優しさがほつとさせる。それにしても、秋田の二月は寒いということ。

川の岸、

所々に芽を出した猫柳、

ふつくらふかれて、あたたかさうに

雪ぎえをまつてゐる。

秋田県西馬音内校五年女子の「猫柳」(三月二十一日・日、第二一九九号)。前二作と同様、秋田県の児童の作品であるが、秋田にも春が間近にきているということ。「雪ぎえをまつてゐる」のは、猫柳とそれを見ている作者だ。

第一四半期、秋田の児童は、季節の変化の中に日々を送っていた。

三 昭和十八年第二四半期における「詩」

第二四半期(四月〜六月)に掲載された「詩」は七四作品。この内、一作品は、企画「作品の学校特集」の作品。この作品を含めて、内容に「戦時下」色に見えるのは、次の一二作品であり、掲載作品に占める掲載率は約一六・二%となる。

17 「たんく」(静岡県元吉原校一年男子、四月四日・日、第二〇三二号)

18 「小川」(秋田県西馬音内校五年女子、同右)

19 「銅鉄回収」

17 「たんく」(静岡県元吉原校一年男子、四月四日・日、第二〇三二号)

18 「小川」(秋田県西馬音内校五年女子、同右)

19 「銅鉄回収」

20 「押し花」(山梨県穂積校六年女子、五月二日・日、第二〇五五号)

21 「鯉のぼり」(神奈川県横浜市一本松校三年女子、五月五日・水、第二〇五七号)

22 「グライダー」(東京市墨田区相生校五年男子、五月十六日・日、第二〇六七号)

23 「床屋のおちさん」(神奈川県横浜市神橋校高二男子、五月十九日・水、第二〇六九号)

24 「手紙」

（神奈川県深沢校六年男子、五月二十七日・木、第二〇七六号）

25 「海を讀へる」

（東京市麹町区東郷校六年女子、六月四日・金、第二〇八三号）

26 「ああ山本元帥」

（東京市荒川区第二峽田校六年男子、六月六日・日、第二〇八五号）

27 「のりまき」

（東京市赤坂区氷川校四年女子、六月十八日・金、第二〇九五号）

28 「かぼちゃ」

（山形県山寺校三年女子、六月二十三日・水、第二〇九九号）

17 「たんく」（静岡県元吉原校一年男子、四月四日）

がうがうと、

ものすごいおと、

ぢめんをゆすつて、

いしがとばされる、

ほくもゆれるみたいだ。

児童の前を戦車が走っている光景。校庭なのか、市中を行くのに出会ったのかは不明だが、元吉原国民学校から遠くない静岡県富士郡上井出村には、少年戦車兵学校があり、作品掲載の前年（昭和十七年）の十月二十四日に、「少國民新聞」の主催による陸軍少年戦車兵学校への「一日入営」が実施され、百五十名の児童が体験したことが同紙十月二十七日（火・第一八九六号）一面に写真と共に掲載されていた。

18 「小川」（秋田県西馬音内校五年女子、四月四日）

お手を真赤に、

お母さんがおせんたく

つめたさう。

そばの小みちを、

まき運びの列がいく。

第一四半期には、作者の在籍校・西馬音内校の児童による「薪運び」を内容とする作品が三作品掲載されていたが、作者の児童はその列を見ていたということか。

19 「銅鉄回収」（東京市荒川区第二峽田校五年女子、四月十八日）

第一四半期には、同じ在籍校学年男子の「銅鉄回収」を内容とする「一本の釘」が掲載されていた。「一本の釘」では、道路に落ちていた古釘を廃品箱に入れたが、この作品では、「組長さんが、銅鉄を集めに来た」ので、「お母さんが物置から古いヤカン、ドビン、バケツなど」を出し、そのほかに、「私の小さい頃の、オモチャもあつた」という。自主的な供出というより、「組長」による、ある種強制的な回収であり、金属製であれば古びた玩具までも、根こそぎ回収対象となつたということ。

20 「押し花」（山梨県穂積校六年女子、五月二日）は、春になってきれいな花が咲いたので、押し花にして「戦地の兵隊さんへ、送つてあげませう。」というもの。慰問文と共に送るということか。

21 「鯉のぼり」（神奈川県横浜市一本松校三年女子、五月五日）には、「こひのぼりは勇ましい、風をのみのおよいでる、米英にらんでおよいでる。ぼうやよ大きくなつたなら、つよい兵たいさんになりなさい。」という一節がある。端午の節句に鯉のぼりが建てられ、それを見上げてのこと。鯉のぼりまでもが、英米を戦う相手と「にらんで」いるのであり、三年生のお姉さんは「ぼうや」が「つよい兵たいさん」となることを願っているということ。この頃はまだ、銃後では、鯉のぼりを建てる余裕があつたということか。

22 「グライダー」（東京市墨田区相生校五年男子、五月十六日）は、「燕

のやうに速く飛ぶグライダーを作るんだ」というもので、この作品が戦時下であるのは、グライダーの飛行大会が「次代の大空をめざす皆さんの愛機比べ」であったからである。「少国民新聞」は、昭和十七年九月二十七日（火・第一八七二号）一面で、「秋空に愛機くらべ 陸鷲が会場上空で戦闘飛行 模型機東京大会の盛況」の記事を写真と共に掲載していた。グライダー作りは、単なる遊びではなく、次代の戦闘機乗り養成の一面として大人達に認識されていたということである。

23 「床屋のおぢさん」（神奈川県横浜市神橋校高二男子、五月十九日）
床屋のおじさんは「歌をうたひながら、鏡の前に立つ」という陽気な人物で「顔がムッソリーニそっくりだ」という。三・国同盟、ムッソリーニが児童に周知されていたということ。

24 「手紙」（神奈川県深沢校六年男子、五月二十七日）は、「中華民國の切手が行儀よくはつてある」兄からの手紙で、「中支にも春が来た。鎌倉山の桜を思ひ出すよ」とあった。手紙を読んだ児童は、「鎌倉山の桜が満開だ。一花取つて手紙に入れてやらう」という。兄が「中支」にいるということであるが、軍隊なのかどうは不明。

25 「海を讃へる」（東京市麹町区東郷校六年女子、六月四日）

遠い 青い

見飽きることのない海、

ハワイ海戦、マライ沖海戦等で、

敵の大艦隊をひと呑みにしてしまつた。

作品の一節であるが、作者は、映画「ハワイ・マレー沖海戦」を見たのであろうか。この映画は、東宝映画が製作し、詩作品掲載の前年（昭和十七年）十二月三日、社団法人映画配給社が配給し公開されていた。

26 「ああ山本元帥」（東京市荒川区第二峽田校六年男子、六月六日）

ラヂオのスイッチを入れた。

すこしふるへた放送員の声が、

だんだん大きく聞えてくる。

僕はききがちがひではないかと思つて

耳を澄ました。

作品の前半部。この作品は、山本五十六元帥の国葬（六月五日）の翌日、「祈りながらお見送り」の見出しで、「綴方」の「山本元帥の国葬」と共に掲載された。作品は、元帥の戦死の放送を聞いた衝撃を内容としているが、その放送は、五月二十一日十五時からの大本営発表のこと。山本元帥は、四月十八日、ブーゲンビル島上空でアメリカ陸軍航空隊に撃墜され、戦死していた。

27 「のりまき」（東京市赤坂区氷川校四年女子、六月十八日）は、特集「作品の学校特集」に「綴方」、「短歌」と共に掲載された詩作品。

内容は、「玉川べりのみどりの原で、たのしいたのしいおべんたう」を食べている所に、「練習機が、ぶうんと勇ましいうなりで、飛んで来ました。」というもの。皆は、「おべんたうの偵察機よ」と空を見上げて、「ばんざあい」と言った。飛んで来た飛行機が偵察機であったかどうかではなく、偵察機という知識がある事が戦時下ということ。

28 「かぼちゃ」（山形県山寺校三年女子、六月二十三日）

先生と一しよにまいた、

甘ぐりかぼちゃ、

元氣よく芽を出した。

水をかけたら、

うれしさう。

作品の全文。「先生と一しよにまいた、甘ぐりかぼちゃ」は、学校園に先生と児童が南瓜の種を播いて、その成長をよろこんでいるとい

うもの。「少國民新聞」は、この作品が掲載された直前の六月十九日（土・第二〇九六号）一面に「増産へ調布第一校の総進軍」の記事を、写真と共に掲載し、荒地を耕して「立派な田を作り」、お米の増産に励んでいる様子を伝えていた。

昭和十六年二月八日、文部省は農林省と協議の上、青少年学徒食糧飼料等増産運動実施に関する通牒を発し、「時局下の最重要国策である食糧増産運動に参加させることにした」（「青少年学徒の食糧増産運動」、「週報」第二二九号、昭和十六年二月二十六日号）。

先生と一緒に南瓜の種を播くのは、国民学校での食糧増産であり、文部省の意向であったということだ。

第二四半期の「詩」作品は、七四作品。この内、作品内容に「戦時下」色の見えるのは、一二作品であり、それ以外の六二作品は児童の日常生活を内容とするものであり、季節柄の作品には、次のような作品があった。

あたたかいこまかい雨が
音もなく降つてる。

どこか遠くでうぐひすが鳴く。

つまづきながら、
けきよけきよと、

春の来たのを告げてゐる。

福島県平第一校五年女子による「うぐひす」（四月四日・日、第二〇三一号）。題名の通り、鶯の鳴き声を遠く耳にした作者の作品であるが、鶯はまだ鳴きなれていないようだ。「つまづきながら、けきよけきよと」鳴くとの表現は見事。

せんろの土手の、

雪はきえてゐる。

土手の草はぼかぼかと

ゆげをだして、

うれしさうなかほしてる。

新潟県高田市東本町校二年女子による「つくし」（五月七日・金、第二〇五九号）の前半部。後半部には「つくしが、小さな頭をだしてゐる」とあり、雪国の高田にも春がやってきたことを実感しての詩作。

おたまじやくしは、

尾をふりふりおよぐ。

ときどきしんだまねをする。

ゆびでつくとすぐにげる。

茨城県日立市駒王校三年男子による「おたまじやくし」（六月二十五日・金、第二一〇一号）の前半部。児童は、おたまじやくしを瓶に入れて眺めている。初夏から梅雨にかけての頃のこと。

第二四半期、児童は、鶯の初鳴きに早い春を聞き、土手にたつ湯気に、頭を出した土筆に春の到来を実感し、初夏の到来をおたまじやくしに見ていた。児童は、第一四半期同様、季節の中に日々を送っていた。

四 昭和十八年第三四半期における「詩」

第三四半期（七月～九月）に掲載された「詩」は四三作品。この内、作品内容に「戦時下」色の見えるのは、次の一二作品であり、掲載作品に占める掲載率は約二七・九％となる。第二四半期と同じく一二作品だが、第二四半期は約一六・二％であり、第三四半期はその約一・七倍となるが、第三四半期の詩作品掲載数が第二四半期より三一作品

減少したことによる。

29 「三人の義勇軍」

(茨城県日立市駒王校四年男子、七月九日・金、第二二一三三号)

30 「思ひ出の声」

(北海道伊達校高一男子、七月十六日・金、第二二一九号)

31 「海」

(北海道伊達校四年男子、七月二十八日・水、第二二二九号)

32 「お母さん」

(茨城県石神校高一女子、七月三十日・金、第二二三二号)

33 「ひま」

(岩手県大槌校六年男子、八月六日・金、第二二三七号)

34 「くまばち」

(山形県山寺校三年女子、八月十一日・水、第二二四一号)

35 「空知川を渡る」

(北海道落合校六年男子、八月二十九日・日、第二二五七号)

36 「軍神部隊」

(東京都明化校六年男子、九月一日・水、第二二五九号)

37 「ひま」

(東京都荒川区第二峡田校六年男子、九月八日・水、第二二六五号)

38 「もも」

(山梨県穂積校六年女子、同右)

39 「武久」

(山梨県穂積校六年女子、九月十五日・水、第二二七一号)

40 「大空」

(東京都荒川区第二峡田校六年女子、九月二十九日・水、第二二八三三号)

29 「三人の義勇軍」(茨城県日立市駒王校四年男子、七月九日)
義勇軍の三人が、
いさましく、
駒王校からでていった。
三人は、あの広い満洲へいつて
荒地を耕すのだ。
義勇軍は、からだがよわくてはだめだ。
心もしつかりしてゐなければならぬ。

三人はからだも心もりつばだ。

三人のお父さんは、

ここにこしながら、

おくつていった。

作品の全文。「義勇軍」は、満蒙開拓青少年義勇軍のこと。数え年十六歳から十九歳の青少年が満洲国に開拓民として送り出された。作者の先輩にあたる三人が義勇軍となったということ。茨城県内原には満蒙開拓青少年義勇軍訓練所があり、この訓練所で三カ月の訓練を受けたのち渡満していった。

30 「思ひ出の声」(北海道伊達校高一男子、七月十六日)

31 「海」(北海道伊達校四年男子、七月二十八日)

同じ在籍校だが、学年は違う。前者の「篠原の兄さん」の生死は不明だが、後者では兄の海軍軍人は戦死していた。

30 「思ひ出の声」

篠原の兄さんが、

入営した時のうれしい声かなしい声。

駅前で、僕にいったあの言葉

「しつかり勉強するんだぞ。」

うれしい声。

「あとをたのむ。」

かなしい声は、
でもいつの間にか消え去つて行つた。

作品の全文。作者と「篠原の兄さん」の関係は不明であるが、見知らぬ出征兵士と見送りの児童ということではなさそうだ。「あとをたのむ。」といった「かなしい声」は、いつの間にか消え去り、「しつかり勉強するんだぞ。」と励ましてくれた。「うれしい声」が思い出されるということであるが、それは入営見送り時の「篠原の兄さん」を思い出すことであった。

31 「海」は、戦死した海軍軍人の「兄さんにまけないりつぱな軍人になる」と父に決意を伝えると、父は「早く大きくなれよ」と笑って言ったというもの。

32 「お母さん」(茨城県石神校高一女子、七月三十日)

鬼をもひしく勇士も、

戦場でたふれた時、

「お母さん」と呼ぶと言ふ。

誰からもしたはれるお母さん

一日も呼ばずにはをられない

ああお母さん

作品の後半部。戦場での死に際して、やはり「お母さん」と呼ぶという箇所が戦時下ということ。

33 「ひま」(岩手県大槌校六年男子、八月六日)

37 「ひま」(東京都荒川区第二峡田校六年男子、九月八日)

40 「大空」(東京都荒川区第二峡田校六年女子、九月二十九日)

33 「ひま」

この間まいたひまの種、

すぐ芽を出して、

ずんずんのびた、

一尺位になった。

作品の前半部。「ひま」は、植物のヒマのこと。成長の早さが見えるようだ。

37 「ひま」

土色と白色のまだらな種をまいて

育てたこのひま。

もう五十糎程になつてゐる。

一生懸命に育てたかひがある。

「戦時下における児童文化」について(その二八)

まるでとげをつけた実、

御国の為と思ふと、

一そうこのひまが、

かはいくなつて来る。

作品の全文。「御国の為」に、ヒマの種を播いて育てているということ。

40 「大空」は、滑空機が大空高く飛びさって、「ひまがのびのびと大きくゆれてゐる。」という内容。この「ひま」も同じ「ヒマ」と。

荒鷲のために

蓖麻を栽培しよう

太平洋に、大陸に、

あの目覚ましい

戦果をあげてゐる荒鷲も

蓖麻油がなければ飛べません

血の一滴! 「ヒマシ油」

それは我等の手でも

作れます 空地に出

来るだけ多くの蓖麻

を蒔いて下さい

勝ち抜くために!

大政翼賛会

帝國農會

帝國在郷軍人

「荒鷲のために蓖麻を栽培しよう」のポスター。ヒマを育てて、蓖麻子油(ヒマシ油)を抽出し、潤滑油など、産業資材とするために栽培を奨励した。33、37、40は、岩手県と東京都だが、栽培は、全国的に奨励された。

34 「くまばち」(山形県山寺校三年女子、八月十一日)

ブンブンくまばちおそろしい

ばく音思わすはねの音。

えものみつけて、

急降下。

こはい顔してとんでゐる。

作品の全文。「くまばち」の様子を内容とするもので、飛ぶ羽音が、戦闘機の「ばく音」を思わせるといふもので、「えものみつけて、急降下」の表現にも戦闘機が想定されているといふことか。

35 「空知川を渡る」(北海道落合校六年男子、八月二十九日)は、「始めて渡る空知川」だけれども、「我は海国男児」だから、「だんじて横切るぞ」と、心に誓って飛込んだといふ内容。「我は海国男児」といふ心構えが戦時下ということ。

36 「軍神部隊」(東京都明化校六年男子、九月一日)

北の戦、北の戦、

ああ七時のニュースは、

一億国民の胸に、

大きな感激をあたへた。

この感激、

この悲奮。

北極の一孤島。

山崎部隊二千の勇士は、

勇敢無比、

最後の総攻撃を決行した。

そして全員が、

玉碎したのだ。

空に見える北極星は、

二千の闘魂が

乗り移ったやうに

北方に輝いてゐる

ああ、

アツツの勇士。

作品の全文。紙面最上部に波線で囲って掲載された。アツツ島守隊の全滅が大本営から発表されたのは、五月三十日午後五時。「少國民新聞」は、六月一日(火・二〇八〇号)第一面全紙で報道された。陸軍省は、八月二十八日、アツツ島で玉碎(五月二十九日)した山崎保代大佐以下二千五百余の全将兵の氏名と進級を発表。「少國民新聞」では、八月三十一日(火・第二二五八号)第一面で「一億が仰ぐ軍神部隊」を掲載し、「軍神山崎部隊」の尊い精神を自分の精神として、「最後の勝利まで戦ひ抜かなければなりません」とした。詩「軍神部隊」もこの流れの中で掲載されたものと推測される。

38 「もも」(山梨県穂積校六年女子、九月八日)は、貫い物の「もも」

(桃)を、「せんちの兵隊さんにおくつてあげたいな」といふもの。

39 「武久」(山梨県穂積校六年女子、九月十五日)は、二歳の弟「武久」

が「りつばな日本の子供となつて、お国のお役にたつように、早く大きくなれ」と願う内容。

第三四半期の「詩」作品は、四三作品。この内、作品内容に「戦時下」色に見えるのは、一二作品であり、それ以外の三一作品は児童の身辺に題材を採った作品であり、季節柄の作品には、次のような作品があった。

青い葉と葉の間から

真赤ないちごが、

顔出して、

何やらこそこそ話してた。

風の吹くたびうなづいて、

ゆらゆらゆれて話してた。

東京都武蔵野町第三校四年男子の「いちご」（七月二十一日・水、第二二二三号）の全文。露地栽培のイチゴは夏が旬。作者には、風に揺られるイチゴが話をしているように思えたということ。

姉さんと、

二人でまいた向日葵は、

お庭に芽が出て元気に育つ。

今日もまたぐんぐんのびると水をやる。

向日葵が大きくなる頃、

やがて私の背も、

大きくなるだろう。

千葉県銚子市高神校六年女子の「向日葵」（八月六日・金、第二二三七号）の全文。向日葵栽培は、戦時下にあっても夏の定番であったということ。向日葵が大きくなる頃には背の丈が伸びていることは無理とは思わうが。

コホロギコホロギ

ヨルニナク。

アチラデモ、

コチラデモ、

ココロトナク。

新潟県新潟市山ノ下校一年男子の「コホロギ」（九月十九日・日、

第二二七五号）の前半部。一年生の作者は「コホロギノ オウチハニギヤカダ」と、コオロギの季節を耳で捉えて見せたいということ。

第三四半期、この季節、真赤なイチゴに頷き、向日葵を仰ぎ、にぎやかなコオロギに秋を描いた。児童は、季節の中で楽しんでいたいということだ。

五 昭和十八年第四四半期における「詩」

第四四半期（十月～十二月）に掲載された「詩」は五〇作品。この内、作品内容に「戦時下」色に見えるのは、次の二五作品であり、掲載作品に占める掲載率は五〇・〇％となる。

41 「菓子」（秋田県山田校六年女子、十月八日・金、第二一九一号）

42 「比島の独立を祝ふ」（東京都佃島校五年男子、十月十五日・金、第二一九七号）

43 「フィリピンの独立を祝ふ」（東京都竹町校三年男子、十月十七日・日、第二一九九号）

44 「父の出征」（東京都荒川区第二峡田校六女子、十月二十四日・日、第二二〇五号）

45 「兄の写真」（茨城県若松東校六年男子、十月二十七日・水、第二二〇七号）

46 「道」（山梨県穂積校六年男子、同右）

47 「少年義勇軍」（秋田県大曲校六年男子、同右）

48 「ヒカウキ」（茨城県若松東校一年男子、十月二十九日・金、第二二〇九号）

49 「教室」（茨城県若松東校高二男子、同右）

50 「お墓のさうぢ」（静岡県沼津第二校二年女子、十一月五日・金、第二二一五号）

- 51 「稲刈り」(茨城県若松東校高二男子、十一月十日・水、第三二一九号)
 「古賀司令官」
 (東京都誠之校六年女子、十一月十二日・金、第三二二一号)
- 52 「ああ納富大尉」
 (東京都小日向台町校五年男子、同右)
- 53 「英霊」
 (東京都荒川区第二峡田校六女子、十一月十七日・水、第三二二五号)
- 54 「防空演習」
 (静岡県沼津第二校二年男子、同右)
- 55 「母の笑顔」
 (東京市荒川区第二峡田校六年男子、十一月二十六日・金、第三二三三号)
- 56 「帰つて来た兵隊さん」
 (同右六年男子、十二月一日・水、第三二三七号)
- 57 「お父さんの出征」
 (秋田県草木校三年女子、十二月三日・金、第三三三九号)
- 58 「日の丸」
 (東京都小日向台町校二年男子、同右)
- 59 「国旗」(山梨県穂積校六年女子、十二月十二日・日、第三二四七号)
- 60 「飛行機」
 (静岡県清水市清水校二年男子、十二月十五日・水、第三二四九号)
- 61 「英霊」
 (東京都南桜校三年男子、十二月二十二日・水、第三二五五号)
- 62 「夕ごはん」
 (福島県永田校六年男子、十二月二十六日・日、第三二五九号)
- 63 「菓子」(秋田県山田校六年女子、十月八日)
- 64 「皇子の切符には、
 「皇軍ニ感謝シテ、召シ上ツテ下サイ。」
 と書いてある。

菓子を買いに行くたび思ふ。
 心から感謝して、
 みんなでいただかうと。

作品の全文。「切符」は、配給切符のことで、菓子を買うには、配給切符が必要になって来たということ。国家総動員法第八条に基づいて、昭和十六年四月一日に公布施行された「生活必需物資統制令」によって、生活必需物資の生産と配給に関して、切符制による配給統制が実施されていた。

- 42 「比島の独立を祝ふ」(東京都佃島校五年男子、十月十五日)
- 43 「フィリピンの独立を祝ふ」(東京都竹町校三年男子、十月十七日)
- 両作品とも、題名にあるように、フィリピンの独立を祝うもの。「少國民新聞」は、42の作品が掲載された前日(十月十四日・木、第二一九六号)に「遂にその日は来た 比島けふ独立を宣言」を掲載した。
- 42は、「長い間アメリカに虐げられてゐた君らの国は、大日本の援けと協力によって、大東亜共栄圏に輝く」国になったという作品。
- 43は、「大日本を兄さんとして、ぼくらの友の国が独立した。(略)共に手を取つて、米英をげきめつしよう。」という内容。
- 五年生がフィリピンの同級生に、「大東亜共栄圏」を、三年生が「米英をげきめつしよう」と作品化したということである。
- 44 「父の出征」(東京都荒川区第二峡田校六女子、十月二十四日)
- 58 「お父さんの出征」(秋田県草木校三年女子、十二月三日)
- 共に、父の出征の見送りが内容。
- 44 「父の出征」は、出征する父を駅まで送る内容。「父のために、日の丸に大きく名前を書いた。」とあり、日の丸への寄書をしたということ。

58 「お父さんの出征」には、「大館まで見送りました。」とある。秋

田でも、東京でも、児童たちの父親は出征して行き、児童たちは、その都度、見送りの列にいたということ。

45 「兄の写真」(茨城県若松東校六年男子、十月二十七日)には「飛行服を着た姿」の兄の写真が、「僕にも来いと言ってるやうだ」とある。飛行兵の兄への憧れということか。

46 「道」(山梨県穂積校六年男子、十月二十七日)

道は僕達の歩く所、

大切にしているか

道がこはれたら、

僕達の手でりつばにするのだ。

作品の全文。児童による道路修理の勤労奉仕ということ。

「少国民新聞」は、昭和十八年八月二十一日(土・第二一〇五号)二面に、「道普請に奉仕」の見出しで、次のような記事を載せていた。

道路を愛しませう。と、暑い日中を福島県の平市、岩城郡のお友達は、中等学校、青年学校のお兄さんお姉さんと力を合はせて、道路の修理に奉仕しました。そのため九万五千五百五十米の道路が、とてもきれいになりました。

「岩城郡のお友達」の学年は記載されていないが、「少国民新聞」を讀んでいる「お友達」であり、文脈からは、国民学校の高学年か高等科と推測されようか。

47 「少年義勇軍」(秋田県大曲校六年男子、十月二十七日)

とほくの歌の声、

走って行けば、

少年義勇軍。

「戦時下における児童文化」について(その二八)

今開拓のかへりみち

力強い足並みの音、

夜も七時頃、

歌つてかへる、

元気のよい義勇軍

秋田県大曲校に通学する児童が、自宅で元気な歌声を聞いて飛び出してみると「少年義勇軍」であったということ。この「少年義勇軍」は、日没まで開拓をしての帰り道で、いつも見る光景だったということか。

48 「ヒカウキ」(茨城県若松東校一年男子、十月二十九日)は、飛んで来た飛行機を見上げたところ「ヘイタイサン」が乗っているのが見えたということ。低空での旋回であったか。

49 「教室」(茨城県若松東校高二男子、十月二十九日)は、毎日強いている教室に「九軍神の写真」が飾ってあるという内容。「九軍神」の発表は、昭和十七年三月六日。前年(昭和十六年)十二月八日の真珠湾奇襲攻撃に特殊潜航艇で参加し戦死した九人の特別攻撃隊員。

50 「お墓のさうぢ」(静岡県沼津第二校二年女子、十一月五日)

51 「稲刈り」(茨城県若松東校高二男子、十一月十日)

50 「お墓のさうぢ」は、「はつとり中尉のおはかを、おさうぢ」したところ、知らない人に「えらいね」を誉められたという内容。二年生児童の奉仕ということ。

51 「稲刈り」は、「勤労奉仕の生徒」が、稲刈りをしている内容。稲刈りの田圃では「ばつたの群」が飛び交い、稲刈りはそのバツタを追いかけているようだった。手を休めた作者の目に映った光景だ。

52 「古賀司令官」(東京都誠之校六年女子、十一月十二日)

さんたり真珠湾以来の大戦果、

このかげには、山本元帥の後を引きついで、

古賀峯一大将が居られるのだ。

今朝の新聞に、

はじめて連合艦隊司令長官としての、

お写真がのつていた。

作品の一節。「今朝の新聞」は、「少國民新聞」の昭和十八年十一月十一日（木・第二二二〇号）。一面に、「第二次ブーゲンビル島沖航空戦大戦果追加発表」を見出して、十日十五時大本営発表の戦果を掲載し、併せて「古賀艦隊司令長官」の三段見出しで写真も掲載した。「追加発表」とは、十一月六日（土・第二二一六号）一面に掲載された、大本営五日十五時発表分「わが海軍輝く大戦果 艦船五十八（以上）を屠る ブーゲンビル島沖海戦」と、十日（水・第二二一九号）に「真珠湾以来の大戦果 第二次ブーゲンビル島沖航空戦」の見出しで掲載された大本営九日十六時発表分の追加報告ということ。この報告は、十月三十一日夜から十一月八日にかけての海戦でのこと。

53 「ああ納富大尉」（東京都小日向台町校五年男子、十一月十二日）

見えるは敵の輸送船

今ぞここをと体当り

納富大尉の指揮のもと、

続く護衛の艦隊に

巨弾の雨をふらせたり。

作品の一節。題名の納富大尉は、空母瑞鶴の飛行隊長。納富健次郎大尉は、十一月八日のブーゲンビル島沖航空戦で戦死。「真珠湾以来の大戦果」の一翼を担ったということ。

54 「英霊」（東京都荒川区第二峽田校六女子、十一月十七日）

57 「帰つて来た兵隊さん」（東京市荒川区第二峽田校六年男子、十二月

一日）

63 「英霊」（静岡県稲取校四年女子、十二月十五日）

54 「英霊」

ラッパの音だ、

ラッパの音もさびしい音だ。

白くつづんだ白い箱、

暮れていくあたりは静かに、

自転車の人も降りて

あたまを下げる。

目の中が熱くなつてくる。

作品の全文。戦死した兵士の遺骨迎えが内容。作者の児童が迎える列にいたということ。

57 「帰つて来た兵隊さん」

長くのびたほおひげ

黒い顔、光る目。

銃をしつかり握つて

「只今帰りました。」

力強く一言いつたきり、

あとは口をむすんだまま歩き出す。

作品の全文。54 「英霊」、56 「母の笑顔」と在籍校学年は同じだが、別の作者。帰還兵の迎えが内容であろうが、兵士には笑顔は浮かばなかったということか。

63 「英霊」

暗くなつた空には星が光りだした。

「気をつけ。」の号令がかかった。

らつぱの悲しい音が心の底まで響いた。

ありがたい気持でいつばいになつて

涙が出た。

すぐ前をお通りになつた英霊に

私達は
最敬礼をした。

作品の全文。遺骨迎えに整列した児童たちの前を「英霊」が進んでいく。54「英霊」にも、弔意のラップパが聞えて来た。整列の外にいる人々に知らせるラップパなのであろうか。児童は、東京で、静岡で、「英霊」を迎え、帰還兵を迎えていたということ。

55 「防空演習」(静岡県沼津第二校二年男子、十一月十七日)

まだ朝の四時ごろ。

そこら中がくらいので、

演習のばくだんがおちると、

そこだけが

ひるまのやうにあかるかった。

作品の後半。児童の家では、「みせのすみにたたみをつんで、ぼうくうがうを作った」。沼津の商店街が自宅ということか。早朝に演習があり、演習で模擬弾が落されたということ。演習の様子が窺われる作品であり、二年生の作者も朝四時ごろの演習に加わっていたということ。

56 「母の笑顔」(東京市荒川区第二峡田校六年男子、十一月二十六日)は、

「大きくなったら、立派な飛行兵になつて、この母に恩を返すのだ。」という内容。寝ている時も、優しい母の笑顔と声が聞えて来るといふ。母への恩返し、「立派な飛行兵」になるといふことが戦時下。

59 「十二月八日」(東京市荒川区第二峡田校六年男子、十二月八日)

60 「日の丸」(東京都小日向台町校二年男子、十二月八日)

両作品とも「三度感激の日を迎へて」の総見出しのページに、綴方、短歌、俳句、書方と共に掲載された。「おこれる米英に、断乎鉄槌を下した十二月八日は、今廻つて参りました。」とあるように、真珠湾

「戦時下における児童文化」について(その二八)

奇襲攻撃の十二月八日、「今日は三度目のその八日」(59)に際しての作品。

61 「国旗」(山梨県穂積校六年女子、十二月十二日)は、「朝会にあがる国旗、いさましい、ずんずんあがる。」と、国旗掲揚が内容。

62 「飛行機」(静岡県清水市清水校二年男子、十二月十五日)

赤い飛行機がとんで来た。

れんしふ機だ、

ぼくは思はず声をはりあげて、

「ばんご。」

とさけんだ。

作品の前半部。近づいて来た爆音の方向を向くと、赤い練習機が飛んできて、見えなくなるまで「見送つてみた」という内容。作者の児童にとっては見なれた練習機ということか。

64 「十二月二十日」(東京都南桜校三年男子、十二月二十二日)

ああ二十日の報だう

タワラ、マキン両島の

柴崎部隊よく砕ときいて

ぼくたち泣きました。

まもりぬかうとあの島を

ああ守び隊のその姿

思ひ出すだにかなしさが、

ぼくたちの胸によせました。

ああ十二月二十日

いつも心に固くもち

あとへつづくぼくたちは

しつかり勉強いたしませう。

作品の全文。「玉砕部隊の霊に誓ふ」の見出しで、綴方、俳句、書方とともに掲載された「十二月二十日」は、「タワラ、マキン両島の柴崎部隊きよく砕」が報じられた日。アメリカ軍は、十一月二十一日早朝にマキン、タワラ両島への上陸作戦を開始し、四日間の激戦の後、両島を制圧し、守備隊は全滅したという。

大本営が、この玉砕を発表したのは、十二月二十日午後三時。「少國民新聞」は、翌日の十二月二十一日（火・第三二五四号）第一面で、「マキン、タラワの皇軍玉砕 五万の大軍を迎へ 十一月二十五日最後の突撃」を掲載した。

65 「夕ごはん」（福島県永田校六年男子、十二月二十六日）

夕ごはん、

みんな手にもつた代用食。

かうしてたべてゐられるのは、

みな兵隊さんのおかげなのだ。

作品の前半部。第一四半期の作品「ごはん時」（二月二十一日）でも、代用食が食べられるのは「兵隊さんのおかげなのだ」とあった。「代用食」でも、「兵隊さんのおかげ」なのが、戦時下ということ。

第四四半期の「詩」作品は、五〇作品。この内、作品内容に「戦時下」色に見えるのは、二五作品であり、それ以外の二五作品は児童の身辺を題材とした作品であった。

第四四半期の季節柄の作品には、次のような作品があった。

季節風がかはる、

空は青いセルロイド

光るは、野のすすき。

黒土の大根の列、

傾いた陽光をさへぎつて

消えてゆく鳥影、
匂ふ風。

東京都武蔵野第三校六年男子の「秋」（十月三日・日、第二一八七号）。風の変わりを膚に感じ、空の青を、すすきの白い光りを、繁った大根のみどりを視野に捉え、夕方、塙に帰る鳥を目で追った。武蔵野の「秋」の中に児童はいたということ。

川のすんだ水の中に、

泥のいもを入れる。

じやぶんじやぶん洗ふと、

さつまいもは

赤つばい色になつた。

山梨県穂積校六年男子の「さつま洗ひ」（十一月五日・金、第二二一五号）。さつま芋を掘り上げ、泥落しの水洗いの様子が内容。作者自身が川に入つての「さつま洗ひ」だ。秋も深まり、山には紅葉が始まつた頃の農作業で、六年生は頼もしい働き手ということ。

ざつとざつくと稲を刈つた。

小さな虫がたくさん

一度にまひ出した。

腰をのばして後におき、

また刈つてその上に

ななめにおいた。

稲を刈る音がまつさをな空の

どこまでもひびいていつた、

ざつとざつくと。

静岡県稲取校四年女子の「稲刈り」(十二月十七日・金、第二二五号)。四年生も立派な刈り手ということ。刈り取った稲を、刈った稲の「その上にななめにおいた。」という。稲刈りが身についているということか。

第四四半期、作者の児童は、季節の、風を、色を受け止め、農作業の担い手の一員であったが、作品の内容と掲載時期とは、若干の疑義を抱くところだ。

「稲刈り」の掲載は十二月の中旬であり、稲刈り作業と投稿時期、或いは掲載時期には、時間的な間隔があったではなからうか。品種にもよるが、稲刈りが十二月中旬にかかる事は考えにくい。

同様に、十二月十日(金・第二二四五号)掲載の「月の夜」(福島県永田校六年男子)では、「どこかで夜業に、稲をこいてゐる」とある。稲こきは、刈り取った稲の脱穀であり、刈り取った後、乾燥させてからの作業ではあるが、何時刈り取った稲だったのであろうか。

また、十二月十二日(日・第二二四七号)に掲載された「朝」(岩手県北股校高一男子)には、太陽がまだ山から出ないうちに、「どこかの家でもう稲こきを初めた」とある。「夜業」に、朝飯前の仕事に、「稲こき」である。作者の児童も「夜業」を、朝仕事を、それぞれを耳に、眼にしての作品であるが、作品内容と掲載時期との間には、季節的な時間の間隔を考えざるを得ない。体感と作品化との時間的關係も不明であり、作品の投稿時期も不明であるが、児童が投稿してから掲載までには、紙面の都合があったということか。或いは、十二月掲載作品に、冬の季節的な作品がなく、秋に到着していた作品を掲載せざるを得なかったということであろうか。

こうした事態には、第四四半期の身辺事象を内容とする作品の掲載事情にあるということであろうか。

身辺事象を内容とする作品の掲載は、第一四半期が四七作品、第二四半期が六二作品、第三四半期が三二作品であり、第四四半期は二五作品であった。

「戦時下における児童文化」について(その二八)

根拠のないことであるが、掲載数が多くなかったということは、投稿数も多くなかった(投稿できる作品がとも言えようが)ということと考えられ、到着していた作品から掲載作品を選んだ結果、作品内容と掲載時期との間に、季節的な間隔がうまれることとなったと推測するのは、いかがであろうか。

六 昭和十八年「詩」作品の概括

昭和十八年に掲載された「詩」二三〇作品のうち、作品内容に「戦時下」色に見えるのは六五作品(約二八・三%)。

内訳は、第一四半期では六三作品中一六(約二五・四%)。

第二四半期では七四作品中一二(約一六・二%)。

第三四半期では四三作品中一二(約二七・九%)。

第四四半期では五〇作品中二五(五〇・〇%)。

「少國民新聞」の前身である「東日小学生新聞」の発行された昭和十二年から十八年における「詩」作品の内容に「戦時下」色を内容とする作品は、次のようになる。

昭和十二年は、二六二作品中一〇(約三・八%)。

昭和十三年は、三六三作品中三一(約八・五%)。

昭和十四年は、三四一作品中三七(約一〇・九%)。

昭和十五年は、三四八作品中三九(約一一・二%)。

昭和十六年は、三四八作品中三一(約八・九%)。

昭和十七年は、二九六作品中五五(約一八・六%)。

昭和十八年は、二三〇作品中六五(約二八・三%)。

十八年の「詩」は、掲載数が前年十七年より六六作品減少したにもかかわらず、「戦時下」を内容とする作品の掲載数は一〇作品増加し、掲載率もほぼ一〇%の上昇となった。また、掲載数も、十二年以降最少であるにもかかわらず、戦時下を内容とする作品の掲載率は十二年以後、最大となった。

六五作品を内容からグループ化してみると、次のようになる。

- 兵器が作品に書き込まれていたもの（九作品）。飛行機や落下傘、戦車を目にしたり、グライダーを作る作品。飛んでいるくま蜂の羽音が「ばく音」を思わせるといふ作品もここに入れた。
- 軍人が作品に登場していたもの（七作品）。山本元帥、古賀連合艦隊司令長官、納富大尉、東郷平八郎、東條英機、九軍神の他、ムッソリーニに似ている床屋の叔父さん。
- 肉親や知人が、出征或いは出征中というもの（六作品）。父が出征し、兄が出征中。
- 英霊・帰還兵の出迎えと玉碎（五作品）。玉碎は、山崎部隊と柴崎部隊のこと。
- 兵隊さんが登場するもの（五作品）。押し花やももを兵隊さんに送りたいや兵隊さんの様に元氣よくなど。
- 薪運び（四作品）。何れもが秋田県西馬音内校五年女子の作品。
- 勤労奉仕（四作品）。雪かき、道路修理、墓掃除、稲刈り。
- 食品（四作品）。代用食、配給切符、戦地に行く梅干し。
- 食糧増産（三作品）。開墾、学校園でのかぼちゃ栽培。
- ヒマの栽培（三作品）。お国の為にヒマを育てるといふものであるが、一作品は、ヒマの上を滑空機が飛んで行くという内容。飛行機の数にも算入。
- 覚悟や決意という気持ち（三作品）。
- 二作品に共通する内容。お母さん（戦場で死に際にお母さんと呼ぶものと大きく育ててくれたお母さんに報いたいというもの）、学校（先生、木剣体操）、勇ましい日の丸、銅鉄回収、三度目の十二月八日、フィリピン独立。
- 以上の他、一作品が防空演習。

第一四半期には、出征見送り、英霊迎えはなく、第二四半期に山本五十六元帥の戦死、第三四半期に山崎部隊の玉碎があったが、第四半期では、出征に、帰還に、英霊の迎えにと、兵士のそれぞれのステーションに立ち会う作品内容となった。

第四四半期には、戦時下を内容とする作品が、それまで以上に掲載され、この年で最も高い掲載率となったのは、それまでの戦況による「英霊」の帰還に加え、第二次ブーゲンビル島沖航空戦（十一月）、「タワラ、マキン両島の柴崎部隊きよく碎」（十二月）が国民に、児童たちに、知らされるなど、戦況の悪化が背景として考えられるところである。

（二〇一九・一一・一一）